

病気の理解に貢献する研究者に憧れて

藤幸知子 (東京大学大学院薬学系研究科・日本学術振興会特別研究員RPD
(現東京大学医科学研究所・特任研究員))

研究の内容と醍醐味

私は大学院在学時に、攻撃性の高いミツバチの脳に新規なウイルスが感染していることを発見し、そのウイルスに関する研究を主に行ってきました。ウイルス感染が動物の脳や行動に与える影響については未だ多くの謎が残されていますが、そうした謎を解明していきたいと考えています。また、今年度より、同じく昆虫(カイコ)をモデル動物として使った感染症研究、特に創薬を視野にいたれた研究も開始しました。研究の醍醐味は、他の誰も気付いていないことを自分が初めて発見・指摘することだと思います。自分の発見をベースにして世界の研究者と新しい学問領域を開拓することには、さらにやりがいを感じます。

進路決定のきっかけ

小学生の時に祖父が亡くなったことをきっかけに、人の病気を理解するための研究をしたいと思うようになりました。その頃は、「研究者」という存在を知らず、研究医になろうと漠然と考えていました。その後、高校時代に塾でお世話になった先生方(当時東京大学の大学院生)から研究活動について話を伺い、研究者になることを考え始めました。大学入学、薬学部へ進学後、久保健雄助教(現東京大学大学院理学系研究科教授)が開始されたミツバチをモデルとした社会性に関する研究に興味を持ち、10年にわたりミツバチとそのウイルスについての研究を続けてきました。

研究と育児のバランスについて

現在もうすぐ2歳になる長男(大学内の保育園に通園中)の子育てをしながら研究活動を続けています。職場の近くに子供を預けられる場所があることは、安心して研究活動を続ける上で必須でした。家庭においては、夫婦(夫も研究者)が互いの仕事の状況を理解して、家事・育児の分担比を流動的に変化させています。仕事・子育て・家庭の維持に対する責任感を持っていれば、自分が何をすべきかは自ずと見えてきます。三者に対する責任感のバランスが夫婦間で大きくかけ離れていると、家庭における負担が一方に偏ってしまいますので、普段から夫婦間でよく話し合っただけで調整するように心がけています。

進路選択についてのアドバイス

どんな進路を選ぶにしろ、必ず苦勞は伴うもので、何かを犠牲にしなくてはならないこともあると思います。私は、自分が夢中になれる道はどれか、どんな苦勞をしてでもやりたいことは何か、を基準に進路を選択してきました。人生において何を重視するか、それを選ぶのは自分でしかあり得ません。世の中の価値観に惑わされず、自分の心をよく見つめることが大事ではないかと思っています。



<藤幸知子(ふじゆきともこ)プロフィール>

1996年 私立女子学院高等学校卒
 1996-1998年 東京大学教養学部理科二類
 1998-2000年 東京大学薬学部
 2000-2002年 東京大学大学院薬学系研究科修士課程
 2002-2005年 東京大学大学院薬学系研究科博士課程、日本学術振興会特別研究員(DC1)
 2005-2009年 東京大学大学院理学系研究科、日本学術振興会特別研究員(PD)
 2006年4-10月 結婚直後、単身でドイツ・ヴェルツブルグ大学に留学
 2007年7-12月 出産・育児のため休職
 2009年4月- 現職